

書評：『日治時期在「満洲」的台湾人』許雪姬訪問・編著

—口述調査から見た民族差別・対立環境下の植民地出身者の教育・生活環境—

趙 軍

日本支配下の植民地時代、台湾の一部の知識人及びその家族たちは、さまざまな理由で台湾を離れ、「満洲」（中国東北地方）などの地域に定住・就職をしていた。記述の便宜上、彼らのことを「在満洲日本人」と名付けておく。台湾で近代教育を受けた歴史的背景は、彼らの人生にとってどのような意義を持っていたのか？そして、彼らの人生を通して、どのような近代台湾における植民地教育の実相を復元できるか？近年、高齢者化しつつある植民地支配史の当事者たちを対象にして、台湾中央研究院近代史研究所などの諸研究機関は、健在中の「満洲国」をはじめとする中国大陸に行った台湾出身者（とりわけ台湾出身の女性たち及び台湾出身の元日本兵たちが中心）に対して口述調査を行い、関連する口述調査報告書を多数刊行した。『日治時期在「満洲」的台湾人』（中央研究院近代史研究所口述歴史叢書⁷⁹）、訪問：許雪姬。記録：許雪姬，鄭鳳凰，王美雪，蔡說麗，李定山，何金生，李謀華，傅慶騰。中央研究院近代史研究所中華民國九十一年（2002）年出版。以下、『在満洲台湾人』と略す）もその中の一冊である。

「在満洲台湾人」とは、日本の植民地時代の台湾に生まれ、日本流の植民地教育を受け、その後同じく日本の海外植民地となった「満洲」（中国の東北地方）に移住し、さまざまな側面で近代日本の海外植民地経営史と密接な関係を持っていた人々である。台湾は1895年の日清戦争後日本の初めての海外植民地となってから、抗日運動は長い間民間で継続されていた。台湾住民の抗日的心理の緩和と日本文化への親しみを覚えてもらうために、歴代の台湾総督は台湾住民を対象とする学校教育と社会教育に対して力を入れていた。独自のシステムと内容で構成された植民地時代の台湾教育は、その後の台湾の人々に対して絶大な影響を及ぼし、今日になってまだたくさんの痕跡を残された植民地時代の特別な遺産である。数年前、植民地時代台湾公学校の日本人教師と台湾人女子生徒の間の感情的な葛藤を描いた映画「海角七号」は、台湾島内で公開後大きな波紋を引き起こし、「日治時代（日本支配時代）」の体験は今日になって庶民たちの人生にいろいろな形で投影している事実はふたたび人々の注目の的となり、歴史研究者の中にも話題となった。事実、筆者自身は台湾の地方都市と農村地域を訪問したとき、80代以上の老人たちに日本語で声をかけられたり、日本の歌謡曲を披露されたりして、教育という「ソフトパワー」の強さを痛感させられた場面を何回も経験してきた。もっとも早く日本の植民地住民となった台湾出身者たちは、その後日本の海外植民地となった「満洲」に渡って、どのような環境下で生活していたかについて、いままで公表された研究成果は全くなく、基本的な資料もほとんどなかった。

『在満洲台湾人』の編著者（訪問者）の許雪姬氏は口述調査の形で、1992年から台湾出身の知識人たちがなぜ「満洲」に行ったのかについて関心を持ち、2001年まで30数名の対象者に対して訪問調査を行った。調査したときの設問は主に、(1)「満洲」行きの理由、背景、

(2)「満洲」での適応と日常生活, (3)「満洲」での民族差別の実情, 日本人と現地中国人との関係, (4)日本敗戦後台湾に戻る経緯, (5)台湾帰還後の生活などの項目であった。これらの調査報告は, 被調査者の日本文化に対する憧れや反省, 日本の植民地支配に対する複雑な感情のさまざまな側面, 日中戦争及び中国内戦中の中国国民党・中国共産党に対するさまざまな体験などプラス・マイナスの両面を交えた回想口述の内容などを, 技術的な整理以外, ほとんど手を加えていないという。一般的に言うと, 歴史資料としての回想録の信憑性は, 主に(1)叙述者の口述内容の信憑性と, (2)聞き取り者・整理者の公開テキストの信憑性, の二点に集中していると思われる。(1)の「叙述者の口述内容の信憑性」について, 『在満台湾人』の中に, 日系企業内の民族差別を厳しく糾弾した内容もあり, 日本人から本当の信頼をもらえないと嘆いていた人間は当時の日本・日本人の仕事, そして日本の企業管理システムに対して高く評価・崇拝している事例もあった(「陳嘉樹, 陳高絃夫婦, 陳正徳先生訪問記録」『在満台湾人』513, 516, 517頁)。また, (2)の「聞き取り者・整理者の公開テキストの信憑性」について, 共産党軍に対して大変な好印象を持っており, 共産党軍の将軍林彪と一緒に食事をした経験のある人の回想もそのまま載せた。従って, 数十年後の回想録とは言え, さまざまな実例と生き生きしている実体験を豊富に盛り込まれた第一次資料として, 『在満台湾人』は基本的には独自性のある貴重な価値を持つ資料集であると判断できる。さらに, 編著者の話によれば, 1999年時点に訪問調査を再開したとき, 1992年に一度訪問した対象者の中にはすでに半数以上の方が亡くなられたという。時間との競争という側面も持つ作業と言えよう。

『在満台湾人』が提供された資料に対する具体的な検討は, 本学経済研究所の研究プロジェクトの報告書で詳しく紹介する予定であるが, ここには, (1)台湾出身者の「満洲」行きの理由, 背景, (2)「満洲」での適応と日常生活, (3)「満洲」での民族差別の実情, 日本人と現地中国人との関係の面において, 筆者が大いに啓発を受けた幾つかの実例を紹介しよう。

まず, 台湾出身者の「満洲」行きの理由について, 何と言っても卒業後の活動できる天地が狭いという厳しい現状だった。「昭和の初期, 日本政府の台湾に対する統治はかなりオープン的な状態になった。しかし, 台湾人とりわけ知識人たちにとっては依然として活路が現れていない」(「洪在明先生訪問記録」『在満台湾人』319頁)。「当時の台湾では経済が不景気で就職は難しかった。その上, 台湾電気会社では, 専科卒業生の月給面では差別待遇があった。日本人なら50元をもらったが, 台湾人なら30元しかもらえなかった。そのため, 私は高等工業学校を卒業したら, すぐにも2人の甥と姪を連れて故郷を離れ, 満洲に行こうと決意した」(「傅慶騰回憶録」『在満台湾人』551頁)。経済不景気状況下の就職難のうえ, 給料面での民族差別をも甘受せざるを得ない生活環境は, 台湾エリート青年たちを「外の世界」に追い出したのだ。

しかし, 就職口と公平の待遇を求めて多くの台湾青年が中国大陆や「満洲国」に渡った現象の裏に, 「満洲国」の生活環境は台湾で教育を受けた彼らにとって, 意外と適応しやすい面もあるなど, もっと深層的な理由もあったと考えられる。

一つめの理由は, 日本語を話せるという語学力は彼らに「満洲」でたくさんの就職のチャンスをもたらしたことである。二番目の理由は, 同じ被支配民族の立場に置かれているにもかかわらず, 満洲に行けば, 台湾人は「準日本人」のような破格の待遇を受けられるこ

とにある。三番目の理由は、「擬似的民族平等・協和」理念の下に生まれた「日本帝国」の「大東亜共栄圏」への幻想を抱いている人もいたという。例えば、陳亭卿夫妻は調査を受けたとき、「私は、当時の日本は（中国の）東北をアジア開発の基地として、大東亜共栄圏の理想を展開しているのではないかと思った。ゆえに、当時東北に行って進路を探そうとしている人々の中に、環境に迫られた者もいれば、理想や目標を求めめるためにやってきた者もいた」と述べた（「陳亭卿先生夫人訪問記録」『在満台湾人』294-5頁）。この三番目の理由を取り上げた被調査者の数はそれほど多くなかったが、植民地教育が支配者側の政治的理念やイデオロギーを生徒の脳裏に植え付けるパワーの強さをもう一度証明してくれた。

「満洲」での適応と日常生活について、一般の歴史書にはほとんど登場しないあるいは短い抽象的な描写で片づけてしまった分野である。しかし、それと関連する歴史の事実やエピソードなどは、『在満台湾人』を通して多数発見できた。

植民地出身の台湾出身者たちにとって、「五族協和」と謳った「満洲国」に渡っても、民族差別の悪夢から抜け出すことができなかった。李訓忠の回想によれば、「当時の東北では、日本の勢力がとても強く、一等国民は日本人、二等国民は台湾人、三等国民は朝鮮人、その次は日本人のところで働いている満洲人、四等国民である。それ以外の人々は五等国民である」（「李訓忠先生訪問記録」『在満台湾人』424頁）。つまり、「満洲国」での社会等級、人間差別の実態は台湾よりも複雑なもので、差別された対象の台湾出身者は地元「満洲人」「北京人」「中国人」よりややましな状態に置かれていた関係で、彼らには少しだけの「幸運感」を与えることはできた。

しかし、「準日本人」と見なされていた「台湾人」でさえ、植民地支配者の心の底からの信頼を受けていなかった。そして、「満洲国」現地に着いてからもさまざまな苦悩が待っていた。

例えば、許文華氏の回想によれば、「1943年（康德10年、昭和18年）、僕は大和小学校を卒業後、安東中学校に入った。皇民化（政策）のため、青木文雄と改名した。当時、「満洲国」に渡った90%の台湾人はみな日本人の名前に変えた。しかし、僕の父は同胞の前に、頑として中国人の名前を使って、自分の日本名を呼ばれるのが嫌だった。当時、僕は日本人の中学校に行き、ほとんど毎日喧嘩をしていた。……喧嘩の原因は僕ではなく日本人の子供達は人をいじめるのが好きだったためだ。この喧嘩ばかりの生活に負けないように、父は僕にいかに急所を突けるかの技を教えてくれた」（「許文華先生訪問記録」『在満台湾人』406頁）という。この資料は、①「満洲」行きの台湾出身者の多くは日本人の名前に改名した。②「満洲」では子供同士の間にも意識的か、無意識的な民族差別が存在していた、という2点の事実を語ってくれた。

台湾で「国語」として日本語教育を受けたため、被調査者の多くは中国語（北京語、「満洲語」）を勉強した経験がほとんどなく、日本語教育は台湾ほど普及されていなかった「満洲」に着いたら、仕事上または生活上の必要性で、初めて中国語を勉強し始める人は大勢いた。職場の手当を利用して本来母語であるはずの中国語を勉強した人がいれば、日本のラジオ局の語学講座を通して中国語を学んだ人もいた。植民地出身の人間にとって、たいへん悲しい体験と言えよう。

そもそも台湾出身者たちの中にも「漢民族」に属している人は主流と思われるが、「満

洲国」に渡った台湾出身者たちの中に、不思議な「郷愁」を抱いていた人もいた。例えば、陳高絃女史にとっては、『満洲』について問もないとき、(地元の) 衛生の慣習がたいへん悪いと思って、なかなか慣れなかった。最初に住んでいたところは満鉄の付属地との間にある程度の距離があって、私はいつも中国人街に日用品を買っていった。ある日、買い物に行く途中で一体の死体が道路に横たわっているのを見て、そばを通る勇気がなかったので、家に引き返した。その後、満鉄付属地の日本人街に引っ越しした。ここの治安がよく、食べ物も日用品もすべて日本と同じく、食べ物も清潔的で、すぐに順応できた。……日本人街に住んでいる関係で、付き合っている人もほとんど日本人で、「満洲語」を学ぶチャンスがなかった。一番上の姉の頼高變は彰化女子高校第三期の卒業生であり、她はいつも読み終わった日本の雑誌を私に郵送してくれた。「満洲」でも日本の雑誌を買えるが、毎月姉が送ってくれた雑誌を通して、東北と遠く離れた台湾にいる姉とのつながりをずっと持っていると感じて、心を温めることができた」(「陳嘉樹、陳高絃夫婦、陳正徳先生訪問記録」『在満台湾人』519頁)。

この回想録の主人公は「満洲」の中国人街での買い物の際、不衛生な環境に嫌悪感を覚え、さらに放棄された死体と出くわして、恐怖さえ感じた。日本人街に移転したら、故郷以上の親切さと快適感が沸き起こした。姉が台湾から送ってきた日本語の雑誌は奇妙にも郷愁と姉妹愛を棲める道具となった。小・中学校などの教育と実生活の環境の影響下、人間の持つ文化的アイデンティティは如何に本来の民族的アイデンティティを打ち破って、人間そのものを大きく変えられた事例の一つと言えよう。

「満洲」での民族差別実情、日本人と現地中国人との関係などについて、『在満台湾人』の中にやはり数多くの事例を提供してくれた。

例えば、「満鉄の列車の車両は一等、二等、三等と分けられ、切符の値段は等を上がることに従って二倍増となる。あのとき、私たちは目的地へ直通の切符を買えたが、「満洲人」の場合、お金があっても買えなく、高等公務員になる人しか買えないと聞いた。一般の「満洲人」たちは三等の車両しか乗れなかった。そのため、[切符売り場では]いつも混雑しており、行列も大混乱して、駅員は棒を持って整列させ、人を殴ったりもした。そばで見た私はこれぐらいのことで人に殴られるまでもないと思った。台湾と日本では、このように人を殴ることはなかった。なんで満洲では駅員が人を殴ることができようか？私は思わずぞっとした。」(「翁通逢先生訪問記録」『在満台湾人』104頁。) 同じく日本の植民地でありながら、植民地支配当局が満洲で実施した民族・種族差別政策は、台湾のよりも露骨的で、しかも大変複雑な系列だったことは、上述の回想からも伺わせることができる。この政策の中に、植民地化された年数の長さに応じ、「台湾人」「朝鮮人」「満洲人」「漢人(ここでは「それ以外の人々」を指す)」など細分化し、それぞれ違った社会的地位を与えることは、非常に意味深長な目的が潜んでいると考えられる。なぜならば、複数の被支配民族の間に人為的に等級や身分の格差を作ることは、植民地支配秩序の安定的維持にとって、大変重要な意義を持っている。事実、『在満台湾人』に取り上げられた数々の歴史の事実とその回想も、「満洲国」における社会等級の格差と人間差別の現状をさまざまな側面から裏付けていた。

その格差と差別の具体例をいくつか見てみよう。

「日本人は「満洲国」で配給制を行い、その経済政策によって配給の仕方も日本人、満

洲人、朝鮮人の三種類があった。われわれ台湾人は日本人の配給に従った。台湾も日本の植民地であるとは言え、満洲に行った台湾人の教育水準が比較的に高かったため、公務員になった人は多く、階級もみんな高かった。医者になった人も多かった。それ以外の職業に従事した人の割合は低かった。そのため、台湾人が受けた待遇は日本人とほぼ同じだった。日本人は白米を配給され、食べきれないほどの量だった。朝鮮人は白米と粟を配給され、満洲人はコウリャンを配給された。コウリャンは非常に不味い食料で、私も食べたことがあった。また、日本人なら砂糖と煙草も使えきれないほど配給され、余った分はみんな市場で売った」(『翁通逢先生訪問記録』『在満台湾人』107頁。)

配給制による民族差別の結果、同じ漢民族の間同士の間でも出身地の違いによって社会での政治・経済的地位が峻別され、生活環境の格差は大きかった。地元出身の漢民族の不満がどんどん蓄積してきた。

配給だけではなく、給料の面でも民族差別政策が実施されていた。

『満洲国』では、台湾人と朝鮮人の待遇は出身地ほどの悪い状況がなかったが、差別待遇はやはりあった。外地手当をもらえるのが日本人だけで、台湾人と朝鮮人にはなかった。しかし、『満洲国』では私たちの官等が上げられたので、日本人と比べても差はそれほどでもなかった。……しかし、官等が上げられることも表面上のことで、台湾人の昇進の機会日本人よりは少なかった。朝鮮人なら、台湾人とあまり変わらなかった。『満洲国』では、朝鮮人と台湾人は二つの等級となっていて、その下には『満洲人』である。『五族共和』とはいえ、結局日本人は中心となっていた。儀式をするときも、日本の皇居に向けて遙拝してから『満洲』の皇居を拜むことになる。結局、日本民族が中心となっていて、本当の『協和』ではなかった」(『陳登財先生訪問記録』『在満台湾人』223頁。)

さらに、ほかの被調査者の回想によれば、大陸科学院で研究者として勤めていた数少ない台湾出身者の研究者でさえ、複雑な心境で「満洲国」での仕事を耐えざるを得なかった。こうして見れば、日本流の教育を受けた台湾の若者たちにとって、あのときの「満洲国」は「地獄」ではなかったが、「天国」でもなかった。

20世紀最大な負の歴史的遺産といえば、戦争と植民地開拓・支配と言えよう。戦争と植民地開拓など帝国主義時代の海外拡張政策は、植民地宗主国の国民を含めて多くの悲劇をもたらした。一方、さまざまな苦難・災難と民族圧迫・民族差別の中に、違う民族同士の民衆は民族間の対立と偏見を超えて、対等的に相手を接し、互いに便宜や助力を提供し合ったこともあった。人間性が恣意に抹殺された時代において、心を温める唯一の側面であった。

ある公学校の生徒の回想の中には、「池田先生との話しになれば、私は今になっても感謝する気持ちです。あんなに素晴らしい先生がいなければ、私は恐らく一人の肉体労働者で一生を終るだろうと思います。池田先生が数学を担当しており、いつも厳しい表情をしていたため、学生たちは窃かに彼のことをスターリンと呼んでいました。しかし、彼は人柄が良く、講義も大変上手でした。……私たち台湾の人間だって高い意気があり、私を可愛がってくれた人には恩返しをしなければなりません」(『葉鳴岡先生訪問記録』『在満台湾人』45頁)という一節があった。これは植民地時代公学校の中に、日本人教師と台湾学生の間個人的友情が育てられた事例である。

複雑な帝国主義・植民地時代の間人間関係の中に、被支配民族・搾取される民族でありな

がら、生活拠点と生活環境が変えれば、擬似的「支配民族・搾取民族」の地位と特権を手に入れた人々も存在していた。しかし、それはあくまで「擬似」的なもので、本来の被支配民族・搾取される民族という残酷な現実とは、このような人々の生活と精神の面に拭いがたい陰を落としていた。日本流の教育を受け、「満洲国」に渡った台湾出身者たちは、このような「辺縁人（境界人）」的な存在であり、「辺縁人」のような気持ちに散々悩まされていた。

「日本〔人に支配された〕時代においては、私は自分が日本人とは思わなかった。日本人も私たちを日本人と認めたくなかった。もちろん、我々は台湾人で、自分は中国人だとも思っていなかった。主人は中国に帰られたことを喜んでいて。しかし、一・二年後、彼の考え方も変わった。『こんな結果になるのを知っていたら、帰れなくて良かった』と言った。『満洲』での一年間は大変だった。遊ぶこともできなかった。一日も早く帰りたいかった」（『林黄淑麗女士訪問記録』『在満台湾人』149頁）。この台湾出身者夫婦の「満洲国」での生活体験は、一言でまとめれば、日本人からは日本人として認められなく、自分からは中国人としての自覚もないというような遊離状態は終始彼らをつきまとっていた。その結果、台湾を逃げ出した彼らは中国社会にも溶け込むことはできなかった。

そのときの台湾出身者たちにとって、故郷（実際の故郷と心の故郷など）がいくつもあったようだが、どれも本当の意味上の故郷ではなかった。いろいろな人々と同族者だろうと思いついていたが、結局同族者になれなかった。「辺縁人」の誕生は、その時代において悲劇的結果だった。

「我々の世代は一番大変だった。日本人の教育を受けたが、日本人に見下げられてきた。同じ民族の『満洲』に行けば良い暮らしを手に入れるのではないかと期待していたが、日本の敗戦と出くわし、その後、共産党の抑圧を受けた。反日の気持ちは反共に変わり、結局台湾に戻った」（『許長卿先生訪問記録』『在満台湾人』606頁）。ここに漏らされた溜め息は、まさに、一生涯の動転、一生涯の不遇、一生涯の遺憾という表現で尽きると思われる。植民地教育を通して受けた影響は結局教育された者の一生涯に陰を落としてしまったと言えよう。

全体的に見れば、『在満日本人』は、これまでの帝国主義時代・植民地時代に関する歴史研究の中に、長い間見落とされてきた（見捨てられてきたとも言えよう）いわゆる「在満州日本人」たちの歴史の様々な側面を「自分史」に近い形で呈示してくれた大変興味深い読み物と思う。この本で紹介された「在満州日本人」の人々たちの生活を通して、植民地支配とはいったいどんなものだったのだろうという面において、我々の認識はより深めさせられるものだろうとも思う。

（附注：『在満日本人』は日本語バージョンがないため、すべての引用文は筆者が訳したものを使っている。）

〔抄 録〕

書評：『日治時期在「満洲」的台湾人』許雪姬訪問・編著
—口述調査から見た民族差別・対立環境下の植民地出身者の教育・生活環境—

趙 軍

日本支配下の植民地時代、台湾の一部の知識人及びその家族たちは、さまざまな理由で台湾を離れ、「満州」（中国東北地方）などの地域に定住・就職をしていた。台湾で近代教育を受けた歴史的背景は、彼らの人生にとってどのような意義を持っていたのか？そして、彼らの人生を通して、どのような近代台湾植民地教育の実相を復元できるか？近年、台湾中央研究院近代史研究所などの諸研究機関は、健在中の「満州国」をはじめとする中国大陆に行った台湾出身者に対して口述調査を行い、関連する口述調査報告書を多数刊行した。『日治時期在「満州」的台湾人』もその中の一冊である。

本書にまとめられた調査報告は、編著者（訪問者）の許雪姬氏は2001年まで30数名の対象者に対して行った訪問調査の結果である。これらの調査報告は、被調査者の日本文化に対する憧れや反省、日本の植民地支配に対する複雑な感情のさまざまな側面、日中戦争及び中国内戦中の中国国民党・中国共産党に対するさまざまな体験などプラス・マイナスの両面を交えた回想口述の内容などを、技術的な整理以外、ほとんど手を加えていないという。この書評は、(1)台湾出身者の「満州」行きの原因、背景、(2)「満州」での適応と日常生活、(3)「満州」での民族差別の実情、日本人と現地中国人との関係の面において、筆者が大いに啓発を受けた数々の実例を紹介した。